批評の方法⑥

心理学的方法

木村治美 訳

大修館書店

批評の方法 6
心理学的方法　　© H. Kimura　1974

1974年1月10日　初版発行

訳者との協定により
検印を廃止する。

訳　者　木村治美
発行者　鈴木敏夫

発行所　株式会社　大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町 3—24
電話　東京 (294) 2221 (大代表)
振替　東京 40504

印刷／壮光舎　製本／謙文社

「心理学的方法」について

この本のもとの題名は『モード・ボドキンと心理学的批評』であり、ボドキンを中心に話が進められる。しかし、アリストテレスにはじまり、フロイトから、ユングら弟子たちにいたる心理学、精神分析学、それに民族学、人類学、はてはゲシュタルト心理学にいたるまで概括され、それらを文学に利用した数多くの批評家も、驚くばかりの博識ぶりで紹介され、論評されている。

ハイマンは、それまでほとんど無名であったボドキンを紹介することにより、心理学的批評全般に光をあてたのである。

ボドキン(Maud Bodkin, 1875-1967)は、エセックスに生れ、ケンブリッジの教員養成大学で教鞭をとっていたが、中年になってから、文学批評に心理学を用いることに興味をもちユングのセミナーに参加したりした。

主な著作は次の三つである。『詩における原型様式』(*Archetypal Patterns in Poetry: Psychological Studies of Imagination*, 1934.)『古代と現代の劇における救いの探究』(*The Quest for Salvation in an Ancient and a Modern Play*, 1941.)『詩・宗教・哲学における原型像の研究』(*Studies of Type Images in Poetry, Religion and Philosophy*, 1951.)

木村治美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

「心理学的方法」について……iv
一　ボドキンとユングの〈原型〉……3
二　ボドキンの方法……11
三　フロイト以前の心理学的文学批評……22
四　文学の精神分析批評……26
五　心理学批評の問題点……49
原　注……59
訳者あとがき……61
索　引……66

心理学的方法

一　ボドキンとユングの〈原型〉

モード・ボドキンの特色は、精神分析を、おそらく今までになくもっともよく文学批評に利用したことである。「想像力の心理学的研究」という副題のついている『詩における原型様式』(*Archetypal Patterns in Poetry*) という彼女の本は、一九三四年、イギリスのオックスフォードで出版されたが、ほとんどなんの注意もひかなかった。いくつかの雑誌では論評され、民俗学や心理学関係の雑誌では熱っぽく紹介されたが、総合文芸雑誌からは、恩着せがましい扱いをうけたのであった。『スクルーティニー』(*Scrutiny*) で、ナイト・デイ・ルイスやオーデンはこれを認め、リーヴィスは攻撃したが、いずれにせよ、彼女の本は、イギリスの批評界に、なんらの見るべき影響を与えなかったように思う。

ボドキンは、アメリカにおいてはなおさら知られていない。アメリカの雑誌で紹介されたり、論評されたことは皆無だと思う。バーク、ウォーレンら、二、三の批評家が、どこかで彼

女の本を手に入れ、利用したことが、例外といえばいえる。

『人名録』（*Who's Who*）を含めて、アメリカ、イギリスを問わず、図書館のどの文献にも、彼女の名は見当らない。『マインド』（*Mind*）と『イギリス心理学雑誌』（*British Journal of Psychology*）、それに、彼女が引用文の脚註でA・M・ボドキンと書いているのが、彼女自身のことであるなら、『イギリス医学心理学雑誌』（*British Journal of Medical Psychology*）も含めてこの三つの雑誌以外に、彼女が論文を発表した形跡はない。戦後になってから、宗教的、道徳的色彩の濃い、イギリスの新しい雑誌『風と雨』（*The Wind and the Rain*）に寄稿している。

ボドキンがこのように、あまり人に知られないのには、いくつもの理由がある。第一に、ボドキンは専門の精神分析学者ではないので、彼女の論文に、専門家としての権威が備わらないこと。その上、彼女は批評の専門家でもないのである。ある出版社の校正係をしていたこともあり、彼女は明らかに、文学好きの素人なのである。たまたま、心理学と想像力文学の両方に幅広く接し、純粋な文学的感受性や、釣合いの感覚、鑑識眼とあいまって、精神分析批評の犯しやすい極端さを、うまくかわすことができたのである。

ボドキンは中年になって、精神分析の文学的可能性に興味を持ち、一九二〇年代に、ユングがチューリッヒで、一般教養の学生を対象に行った、分析心理学とその意味に関するセミナーに参加したといわれている。彼女の論文は、主にユングの説と洞察に基づいている。しかし、あくまでも彼女独自のものであり、ユングがそれを知っていたとは思えないし、知っていたとして、ユングがそれを認めたかどうか疑わしいのである。

私は、ユングのにしても、他の心理学者のにしても、その説を専門的に論ずる資格はないが、芸術に適用される部分の概略を述べることは、ボドキンの著作を検討する上に必要であると思う。

文学的見地から、一番重要なことは、〝原型〟の概念である。ユングは『分析心理学論集』(*Contributions to Analytical Psychology*)の中の一文「分析心理学と詩との関係」で、この概念を詳細に定義している。原型とは、無意識の原始心像であり、同一タイプの無数の経験の心理的残滓であり、原始時代の先祖たちの心理にすでに認められたものが、どういうわけか、脳の構造の中に遺伝されて伝えられたものである。原型とは、だから、人間の中心的経験の、昔ながらの基本的様式のことであり、ユングの仮説は、特別な情緒内容を持つ詩や芸術の奥底に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

は、こういう原型がひそんでいる、ということである。ボドキンが追求しようとしたのも、これである。

ユングにとって、これらの原型様式は、コミュニケーションの鎖にそって存在し、詩人の無意識の中にある形態であり、また、詩に現れるテーマの繰り返し、イメージの反復であり、読者や聴衆の無意識のなかにある形態である。これは民族の過去につながる普遍的無意識の概念を基にしており、未開人のために、神秘的英雄を生み出し、文明人のためにも、似たような個個の空想をつくりあげている。そして、それが主に現れるのは、比較的身近なもので、無限に繰り返される昔ながらの象徴を通してである。（この考えが、ヴィーコの唱えたような歴史の循環説にごく近いことは、明らかであろうし、ジプシーの夢の本に現れる一定の象徴のために、フロイトの自由で経験的な夢の象徴に、シュテーケルが修正を加えたものにも、もちろん似てくる。またすでにヴィーコの影響を受けていたジョイスのような作家にとって、『フィネガンズ・ウエイク』の主人公H・C・エヴリボーディを創造するのに利用できる心理学を探すことは、なんと魅力的であることか。）

ユングによれば、神経症患者と同様、芸術家も、時に無意識的に、時に〝視覚的〟過程を通

して、未開人の宗教的儀式の経験に起源を有する神話を、詳しく再生する。しかしながら芸術家は神経症患者ではない。芸術家である以上、神経症患者よりもはるかに深淵な意味を告げる。『変遷』(*Transition*)の〝心理学と詩〟の章で、ユングは詩人のことを「普遍的人間にして、人類の無意識の魂の働きを伝え、造形する人」と称えている。そして、結局、次のようなことになる。つまるところ、芸術とは、われわれがその起源を全く知らぬものの自律的複合体であり、科学の才覚など寄せつけぬ表現形態である。精神分析にできることは、すでにある素材を研究し、説明を加えることなく、創作の過程を記述することである。(1)

これ以外のユングの概念——たとえばフロイトとの訣別のもとになったリビドー論、ユングはこれを、単なる性的エネルギーとしてでなく、心的本能的エネルギー一般であり、ベルグソン流の生の飛躍の一種だと定義した。また、リビドーが内に向くか外に向くかによってきまる内向型、外向型といった人格の基本的タイプ。理想でありこころの像であるところの〝アニマ〟、相補的に外界に対処する〝ペルソナ〟などのユングの用語——これらは、ボドキンその他の文学批評全般にわたって、大した意味をもっていない。ボドキンが認めているように、文学作品の分析の基礎になる概念は、普遍的無意識と、その原型である。

多くの点で、ユングの分析心理学は、フロイトの精神分析よりも、文学批評には得るところが多いように思えるかもしれない。ボドキンは二つの利点を認めて、次のように書いている。

フロイトの用語は、詩における個人の心と社会的遺産との相互作用を、正当に評価することができない。というのは、フロイトが設定する仮定条件は、生命の過程の産物の、より新しいより高級なものも、原初から存在した元素によって説明されることが必要だからである。また、フロイト的作家たちが、親子間の肉体面の関係にのみ専心するのは、もう一つの、同じくらい価値がある見解を切捨てることだ。つまり、子供に及ぼす親の不思議な力、圧倒的な影響力は、コミュニティの一層広汎な影響力や、そこに蓄積されているものへ通じる最初の導管としての働きにあるように思われることだ。

しかし、文学批評の上で、ユングの心理学がフロイトをしのぐ主な点は、ユングと違って、フロイトは一時期、芸術というものを神経症の表現、とりわけ、発達段階における自己愛期の産物であり、現実で満たされぬ欲望から生れる空想的願望充足、あるいは代償行動であるとした点である。フロイトは『文明と不満』(*Civilization and Its Discontents*)の中で、「美」について、はっきりと書いている。「美が性的感情の領域から派生していることは確実である。美への愛は、ある目的を抑圧された感情がたどる一典型である。」これは、精神分析は「他の多

くのことはいうが、美についてはあまり言及しない」ことを認めてもなお言えることである。

にもかかわらず、見解を異にする弟子たちのだれかれ以上に、現代の作家批評家のほとんど全部に、恐るべき影響を及ぼしたのは、フロイトである。アドラーは〝劣等コンプレックス〟という常套語をのぞいては、文学には比較的影響を与えなかった。(『偉大なギャツビー』(*The Great Gatsby*) から『サミーを走らせるもの』(*What Makes Sammy Run*) にいたるまで、自我や権力欲や代償とかを扱ったほとんどすべての現代の小説は、知らず知らずに、アドラーの個人心理学の何物かを吸収していることは、認められなければならない。[2])

チューリッヒでは、ジョイスがユングの影響をいくぶん受けはしたが、そこ以外には、ユングの信奉者すら、多くはいなかった。主なものでユージン・ジョラスと、短い過渡期に存在したパリのグループ、それにジェイムズ・オッペンハイマーをとりまくこの国の社会主義派詩人や批評家のグループがあげられよう。[3] フロイトと見解を異にしたシュテーケル、ランク、その他の者たちは、専門分野以外では、さらに目立たぬ存在である。

ユングの心理学の普遍的、肯定的な本質は、文学批評にとって、最大の利点であるが、最大の危険もはらんでいる。それは、不合理性、神秘性、〝民族の記憶〟、などの賛美にのめりこ

み、ナチやファッシストの思想家にとって、ユングを極めて魅力的なものにしてしまう傾向である。ボドキンは、ユングの思想のこの落し穴を充分に避けはしたが、少なくとも一度は、血と汚濁のナチの一派にユングを好ましく感じさせたあの不合理性を賛美し、そこに曖昧な可能性を見出し、「理性よりはむしろ感性によって」内にひそむ心理的パターンを再現するよう、絶え間ない努力を要求している。とはいえ、大体においてボドキンは、ユングの形而上的神秘性よりは、科学的分析的な面を用いており、『詩における原型様式』の『エピグラフが、ユングの言葉のなかで一番世間に感銘が薄く、ユングも心底、謙遜している個所であるのは意味深い。

> 哲学的批評は、どの心理学も――私のを含めて――主観的告白という特徴をもつことを、わからせてくれた。……人間に関する人間の知識の源に、わたしが寄与することができたのは、この事実が不可避であると認めることによってである。

二　ボドキンの方法

『詩における原型様式』は、題名が示す通りのことを、正確に行っている数少ない本の一つである。この本は、詩における原型様式を論じているのである。これは六章からなり、第一章では、悲劇を例にあげて、原型に関する一般的問題を提起し、アーネスト・ジョーンズの『ハムレット』のエディップス・コンプレックス研究を論じている。残りの五章では、それぞれ、『老水夫行』(*The Ancient Mariner*)の再生の原型、コールリッジ、ミルトン、ダンテにおける天国と地獄の原型、詩に登場する原型的な何人かの女性、原型的悪魔、英雄、神、現代文学にみられるいくつかの原型、などを扱っている。

方法論的にいえば、彼女のやり方は二種類に分けられる。すなわち『老水夫行』の再生のテーマのように、一つの作品の中にある原型を、詳しく研究する行き方と、大詩人たちの原型的女性を扱った章のように、多くの作品に見出されるある一つの原型のさまざまな変種を比較す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook